

中上級日本語学習者のレポート作成のための作文授業

木戸 光子

要 旨

本稿では 2004 年度 1 学期に筆者が担当した中上級日本語学習者対象の「日本語作文ⅡA」の授業について報告する。中上級日本語学習者であっても作文力が不足している留学生がいるため、そのような学生のための作文授業が必要とされている。この授業の目的は大学レベルのレポート作成ができることである。この授業では学生は、レポートの文章構成の一部として活用できるような課題作文を毎回書いて添削されることにより、レポートの文章構成や表現を学習する。作文添削と講義を通して学生がレポートにふさわしい文章構成や表現を認識することが重要である。

【キーワード】 レポート作成 作文 中上級学習者 書きことば 客観的表現

Teaching Japanese Academic Writing to Intermediate and Advanced Students

KIDO, Mitsuko

【Abstract】 This paper is a report on the course "Japanese composition IIA," which I taught to intermediate and advanced Japanese students in the spring trimester, 2004. This course was developed to meet the needs of intermediate and advanced foreign students lacking academic writing skills for a course in Japanese academic writing. The goal of this course was to write reports for academic purposes at the university level. In this course students learned about the structure and expressions used in reports by writing one section of a report each week and having it corrected. In corrections and lectures I emphasized the importance of recognizing the structure and expressions used in reports.

1. はじめに

本稿は、2004年4月から6月までの1学期に行った日本語補講6レベル対象の「日本語作文IIA」の授業報告である。中上級日本語学習者が日本の大学で日本人学生とともに授業を受ける際、答案やレポートを書くことが必要になる。しかし、日本語能力試験1級合格者でも不適切な文章を書くことがある。つまり、文法や語彙などを組み合わせて文を作って文章にすることはできても、レポートにふさわしい文章表現には必ずしもなっていない。そこで、この授業では講義と作文添削を通してレポート作成に必要な文章構成や表現を学ぶために、ほぼ毎回作文の宿題を課し、さらに、中間レポートと期末レポートを課した。

本稿では、授業概要を簡単に説明し、レポートにふさわしい文章表現という観点から学習者の作文の問題点を述べ、さらに、授業内容や方法等に関する学習者への授業アンケート結果も報告する。

2. 「日本語作文IIA」2004年度1学期(4月-6月)の概要

授業は週1コマ(75分)10週で10回行った。受講者16名で、うち7名は日本語能力試験1級合格者である。国籍は、中国6名、韓国6名、ポーランド2名、ハンガリー1名、タイ1名だった。

中上級レベルの学習者を対象に、レポートや答案など大学の授業で必要な作文能力の育成を目標にした。具体的には、作文練習を通して、一般的なレポートの形式、文体、表現を学ぶことである。

授業内容は以下のとおりである。

- ・文を正しく書くこと、論理的に文をつなぐことを練習する
- ・ある話題について読んだり聞いたりした内容を構造化して、レポートなどの文章にまとめることを学ぶ
- ・「問題提起・調査概要・結果・考察・結論」というレポートの構成を学ぶ

この授業では、学部レベルの学生がレポート作成全般に共通する文章表現を学ぶことに重点を置いた。昨年度までは「日本語作文II」は、学類(一般の大学の学部に対応する)の日本語・日本事情科目として学類生の外国語科目等の単位となる科目だった。しかし、今年度は日本語補講コースとして大学院研究生も受講できるようになった。そのため、従来なら対象としなかった大学院レベルの学生が受講するようになったが、大学院レベルでもこの科目で取り上げる文章表現は未習のことも多いとの判断から、授業目標と内容の設定を行った。

授業方法は、講義と宿題の作文添削を中心に行い、授業では時々グループディスカッションで作文添削や課題作文の内容について検討した。宿題はレポートの文章構成の一部として活用できるような作文(A4紙1枚程度)を課し、その週の金曜17時までにEメールでword添付ファイルで教師に送り、次週の授業で添削した作文を返却した。返却時には、構成や表現についての説明を学習者全員への講義や個人への注意として適宜行った。

授業は以下のように中間レポートと期末レポートを大きな区切りとして、前半はレポート作成に必要な

基本的な文章表現、後半はレポートの構成のうち「問題提起・調査・結果・考察」という文章構成を取り上げた。

- (1) 4/19 オリエンテーション
宿題：文章を読んで説明する（「暗黙知」・「世間」とは何か）
自国の学校制度の比較
 - (2) 4/26 レポートの文体・表現1、比較して書く、説明の書き方練習1
宿題：自国と他国の学校制度の比較
 - (3) 5/10 レポートの文体・表現2、分類して書く
宿題：ある1つの事柄について分類の表現を使って説明する
 - (4) 5/24 レポートの文体・表現3、引用して書く
宿題：題を決めて中間レポートの課題についてメモを作る
参考文献を1つ以上持ってきて次の項目をメモする
（書名または新聞・雑誌名、著者名、出版年、出版社名）
 - (5) 5/31 レポートの構成1－問題提起・調査概要・結果・考察
 - (6) 6/7 レポートの構成1続き－問題提起・調査概要・結果・考察
宿題：「私の科学観」（日高敏隆、日本経済新聞1992年8月3日朝刊）
を読んで「マツノキハバチ」の実験レポートを書く
 - (7) 6/11 中間レポート返却、説明の書き方練習2（答案の表現）
 - (8) 6/14 レポートの構成2－問題提起・調査概要の書き方
 - (9) 6/21 レポートの構成3－結果・考察の書き方
宿題：期末レポートのテーマを決めてアウトラインを書く
 - (10) 6/28 レポートの構成4－結論・要約の書き方
レポートの構成・表現のチェックシート確認
- 6/4 中間レポート提出
- 6/30 期末レポート提出

前半では、レポートの文体・表現として「である体」「書きことばと話しことばの違い」「主観的表現と客観的表現の違い」など、レポートの基本となる文体・表現に注意して書くことを講義と作文練習と添削を通して学習するようにした。中間レポートではこれらの基本的なことが実際にできているかどうかを確認した。「（ ）をどのように利用すべきか」という題で、定義・影響（良い面・悪い面）・どのように利用したらよいか、についてA4紙2、3枚（40字×30行）のレポートを課した。

後半では、期末レポート作成のためのアウトライン作成や下書きを授業とほぼ同時進行させながら、一

定の文章構成で書くようにした。レポートの構成は専門で異なるなど1つに絞るのは難しいが、この授業ではどのレポートでも必要とされると考えられる問題提起・結果・考察の書き方に重点をおいた。期末レポートでは、『平成11年度国語に関する世論調査』（文化庁、大蔵省印刷局、2000年）の「II 調査結果の概要」1-19のテーマの中から1つ選んで、その調査結果の数値を基に「問題提起・調査概要・結果・考察・結論」についてA4紙3-5枚（40字×30行）のレポートとそのレポートの要約（400字程度）を課した。

教材は、自作教材の他に市販の教材も一部参考にした。『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』（二通信子・佐藤不二子、凡人社、2003年）は比較・分類・引用の表現や中間レポートのモデル文章として参照した。『留学生のための大学の授業へのパスポート』（ピロツタ丸山淳・長田紀子・清水澤子・等々力櫻子・吉田直美、凡人社、1996年）は説明の書き方練習で特に答案の表現を参照した。『理工学を学ぶ人のための科学技術日本語案内』（山崎信寿・富田豊・平林義彰・羽田野洋子、創拓社、1992年）はレポートで書くべき事項と表現を参照した。

添削では次のような添削記号と項目を設け、作文全体について学習者に作文の評価のポイントがわかるようにした。

添削記号：○よい △一部問題がある ×よくない ?意味不明のため添削できない

添削項目：である体 書きことば 客観的表現 文章構成 段落 文法 漢字

なお、宿題提出はワープロ文書にし、作文中の文章表現の添削については手書きで訂正した。

3. 学習者の書くレポートの文章表現の問題点

以上のような授業を通して、学習者はレポートの表現と構成を学習した。その際、添削や練習で明らかになったレポートの文章表現として問題となる点を以下に述べる。

まず、文体について、「である体」の不使用以外に注意すべき点は、新聞や雑誌記事、いわゆる評論の文章を書きことばの「硬い文章」としてレポートの文章と同種のもので学習者が考えていることである。新聞のような文章が書けるようになりたいということを学習者からしばしば聞いた。しかし、新聞記事やコラム記事、解説記事は、レポートの文章とは異なり、「だ体」基調の文章が多く、体言止めが多用されている。さらに、「主観的表現」の多用、例えば「のではないか」と畳み掛けるように何度も使用して主張するなど、レポートの文体や表現とは異なった文章表現が用いられている。

それと関連して「である体」と「だ体」の混用は特に前半の宿題で多かった。「だ体」使用のほか、体言止めの使用も目立った。また、「のだ文」と「である体」の混用もあり、名詞文以外の形容詞文・動詞文で「高いである」「行くである」のような誤用も見られた。このような誤用は文の種類による文末の文体の違いという文法の問題と考えられる。

また、語彙の選択の問題が見られる。レポートでの漢語の使用について、「硬い文章」では漢語を多用したほうが良いといった文体上の問題と学習者は考えていた。しかし、語の意味をより限定して詳述するといった観点から漢語の語彙の選択をする場合もある。例えば、「する」ではなく「行う」を選択する場

合、「行う」ではなく「行動する」「活動する」といった漢語による意味の限定・詳述をする場合である。書きことばと話しことばの違いの認識や、レポートにふさわしい書きことばの認識があいまいだと言える。

さらに、客観的表現について、自分の体験をそのまま書いたり、感想を書いたりする作文も見られた。体験や感想はレポートではよくないといった指導がされることもある。しかし、もう一步進めて、「私は」で始まるような主観的表現による体験や感想について、どのように客観的事実や客観的意見として表現するかを学ぶこともレポート作成では重要ではないだろうか。例えば、自国の教育制度について、現在の教育制度を調べて書く場合のほかに、自分の体験した当時の教育制度を一個人の体験を通して書く場合である。そのような自分の受けた教育制度に対して、当時の生徒の一員としての意見、また周囲の人々の意見はどのようなものだったかを書けば、十分客観的なレポートの表現になるはずである。

文章構成に関しては、構成に必要不可欠な部分が書かれていなかったり、書く順序が適切でなかったりしていた。その際、単なる表現上の問題ではなく、内容の不備に起因する場合がある。例えば、問題提起の部分で、背景の説明をして問題点を指摘し、レポートの内容の予告をする、という場合、問題点の指摘で「～の解明はまだなされていない。そこで、このレポートでは～」のように不足点の指摘のみに終わってしまう。

これは型による作文指導の問題点でもある。型に沿って文を連ねて文章にしていけば問題提起らしき文章はできる。しかし、内容面では、どうしてその解明をするのが必要なのか、ないからするという以上の必然性は何かを説明することが要求される。このような内容面の検討は日本人学生対象のレポート・論文の書き方の教科書では重要視されている一方、留学生対象の日本語教育の作文教科書では表現自体の正確さが主眼となるためか、内容と関連したこのような指摘はあまりないようである。例えば、留学生向けの教科書『大学・大学院留学生の日本語 ④論文作成編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会編、アルク、2002年、pp.16-25）では、例えば「先行研究の問題点の指摘」として「……Nについての研究は 少ない／ほとんどない／ない。」「……Nについては解明されていない。」など構成にあった文型を紹介し、それらの文型を組み合わせることを中心に説明している。一方、日本人学生向けの教科書『これから論文を書く若者のために』（酒井聡樹、共立出版、2002年、pp.64-69）では「わかっていないからやるのか」という節を設け、内容面の検討に数ページを割いて文章例を挙げて説明している。

4. 授業アンケート結果

授業終了時に学習者に対して次のような授業アンケートを行った。受講者 16 名中アンケート時に出席していた 13 名より回答を得た。

作文アンケート

自分の作文をよくするために役に立ったものと役に立たなかったものを選んでください。

1. 授業内容について

(レポートの表現) a. 比較 b. 分類 c. 引用

(レポートの構成) d. 問題提起 e. 調査概要 f. 結果 g. 考察 h. 結論 i. 参考文献

(説明の書き方練習) j. 説明の書き方 k. 試験問題を理解する

役に立ったもの () 役に立たなかったもの ()

2. 授業方法について

l. 講義 m. グループディスカッション n. 宿題 o. 作文添削

役に立ったもの () 役に立たなかったもの ()

3. 作文添削について

p. である体 q. 書きことばと話しことばの違い r. 文法 s. 客観的な表現

t. 文章構成

役に立ったもの () 役に立たなかったもの ()

4. 宿題について

u. 「暗黙知」「世間」の説明

v. 「自国の学校制度」の作文

w. 「自国と他国の学校制度の比較」の作文

x. 「分類」の作文

y. 「引用」の作文

z. 「マツノキハバチ」の作文

A. 中間レポート

B. 期末レポート

役に立ったもの () 役に立たなかったもの ()

5. 授業についての意見など、お書きください。

()

授業アンケート結果を以下、1 授業内容、2 授業方法、3 作文添削、4 宿題、の順に表にまとめた。各項目について、役立ったと答えたもの、役立たなかったと答えたものの人数を数えた。役立った、役立たなかったを足して13人にならないのは項目によって無回答があったためである。

なお、このアンケートは留学生センターが毎学期行っているアンケートとは異なり、筆者自身がこの授業のために作成・回収したものである。

表1 授業アンケート結果 1 授業内容

	レポート表現			レポート構成						説明の書き方練習	
	比較	分類	引用	問題提起	調査概要	結果	考察	結論	参考文献	説明の書き方	試験問題を理解する
役立った	10	10	9	10	9	8	9	8	9	10	6
役立たなかった	0	1	2	0	1	1	0	0	0	1	3

表2 授業アンケート結果 2 授業方法

	講義	グループ ディスカッション	宿題	添削
役立った	7	4	10	13
役立たなかった	0	6	1	0

表3 授業アンケート結果 3 作文添削

	である体	書きことばと 話しことばの違い	文法	客観的な 表現	文章構成
役立った	10	12	9	13	10
役立たなかった	1	0	1	0	1

表4 授業アンケート結果 4 宿題

	暗黙知・ 世間の説明	自国の 学校制度	自国と他国の 学校制度の比較	分類	引用	マツノキバチの 実験レポート	中間 レポート	期末 レポート
役立った	3	5	9	10	8	6	12	9
役立たなかった	5	2	0	0	2	2	0	1

「1 授業内容」については、どの項目もほとんど評価が高い。ただし、「引用」と「試験問題を理解する」が相対的に低い評価だった。「引用」の授業で他の授業より質問が多かったことから、授業内容の理解や教師の説明不十分が原因かと考える。データの引用とデータの解釈の引用の混乱などに受講者の納得できる説明や例が挙げられなかった。また、「試験問題を理解する」は振替授業のため通常の授業とは別枠で行った。その結果、通常の授業の流れから外れた内容と受け取られたかもしれない。

「2 授業方法」については、特に「添削」「宿題」が高い評価を得た。毎回作文の宿題を課し、詳しく添削したものを次の授業で返していくという従来行われてきた作文授業の方法を採った。このような教師の添削中心の作文授業については、学習者主導ではないなど批判もある。しかし、この授業の受講者は詳細な添削を期待していたことがアンケート結果によりわかった。

「3 作文添削」については、どの項目も評価が高く、特に、「客観的な表現」「書きことばと話しことばの違い」の評価が高かった。「客観的な表現」では、レポートや論文に適した表現を選ぶことを注意した。感想・体験談などをそのまま表現しないこと、いわゆる評論や新聞・雑誌の解説記事やコラムのような文体・慣用句の多用されたものを書かないことなどである。これは「書きことばと話しことばの違い」とはレベルが異なる。例えば、学校制度についての説明を自分の体験から書く場合、ただ自分自身の体験談を書くのではなく、自分の体験に基づいてそれを一般化しながら書く、ということである。

「客観的な表現」の練習は日本語能力試験1級合格以上の学習者でも必要な場合が多い。その一因として、日本語教育の授業で学習してきた文章は中上級でも新聞や雑誌などのマスコミの文章が取り上げられることが多いためではないかと考える。だ体で慣用句の多いジャーナリズム独特の構成の文章は、大学での勉学で接する専門書や論文、教科書などの文章とは異なる。したがって、同じ書きことばでも表現や文体などの相違を学習者に気づかせることが必要になる。

「4 宿題」については、中間レポート、分類の評価が高い。期末レポートより中間レポートのほうが評価が高いのは、中間レポートを通して授業で学んだレポートの表現が定着したと受講者が実感したためではないかと考える。受講者のレポートへの時間のかけ方や内容を見ると、期末レポートより中間レポートのほうが熱心に取り組んでいる感がある。さらに、期末レポート提出の時期は他の授業の試験期間とも重なっており、受講者が時間をかけてレポートに取り組めない事情もある。受講者のコメントに、宿題が多い、この授業の他にも専門の授業もあるのできびしい、といった宿題の負担を訴えるものもあった。

一方、低い評価は説明の宿題である。これは文章を読んで記述式の答えを書くという答案形式の書く練習である。しかし、このような答案の書き方練習は、この授業のような作文とレポートを書く練習の中で身につけていくものなので、特に必要なかったと考える。受講者のコメントにも授業全体のこととして「今ごろ、テストで助かってます。」と書いてあった。

5. おわりに

以上の実践報告を通して、レポート作成に向けた作文学習では学習者が今まで接してきた文章とレポートについて文章構成や表現の違いを認識させること、その認識は講義だけでなく実際の作文練習と添削を

通して行うことが重要であることがわかった。また、アンケート結果を通して、授業で取り上げる文章や作文練習、授業方法などは改善の余地があるものの、レポート作成のための作文授業としては効果があったと考えられる。

このような中上級学習者対象のレポート作成のための授業では個々の学習者の抱える問題点が異なることが多い。今後はレポート作成に必要な文章表現の授業内容・教材を精選し、将来的には一斉授業形態だけではなくコンピュータ利用の個別学習や遠隔学習への応用を目指したい。

参考文献

木戸光子(2002)「日本語教育におけるレポート・プロジェクトの試み」『日本語教育方法研究会誌』Vol.9 No.2 日本語教育方法研究会 16-17

木戸光子(2004)「作文教育に関する三つの報告 報告1 留学生に対する作文教育」(第2章)『論理的文章作成能力の育成に向けて』(日本語教育ブックレット5)独立行政法人国立国語研究所 21-31

付記 本研究は平成16年度筑波大学人文社会科学研究所プロジェクト助成研究B「blogを利用した中上級日本語作文学習のための教材開発」の助成による研究の一部である。